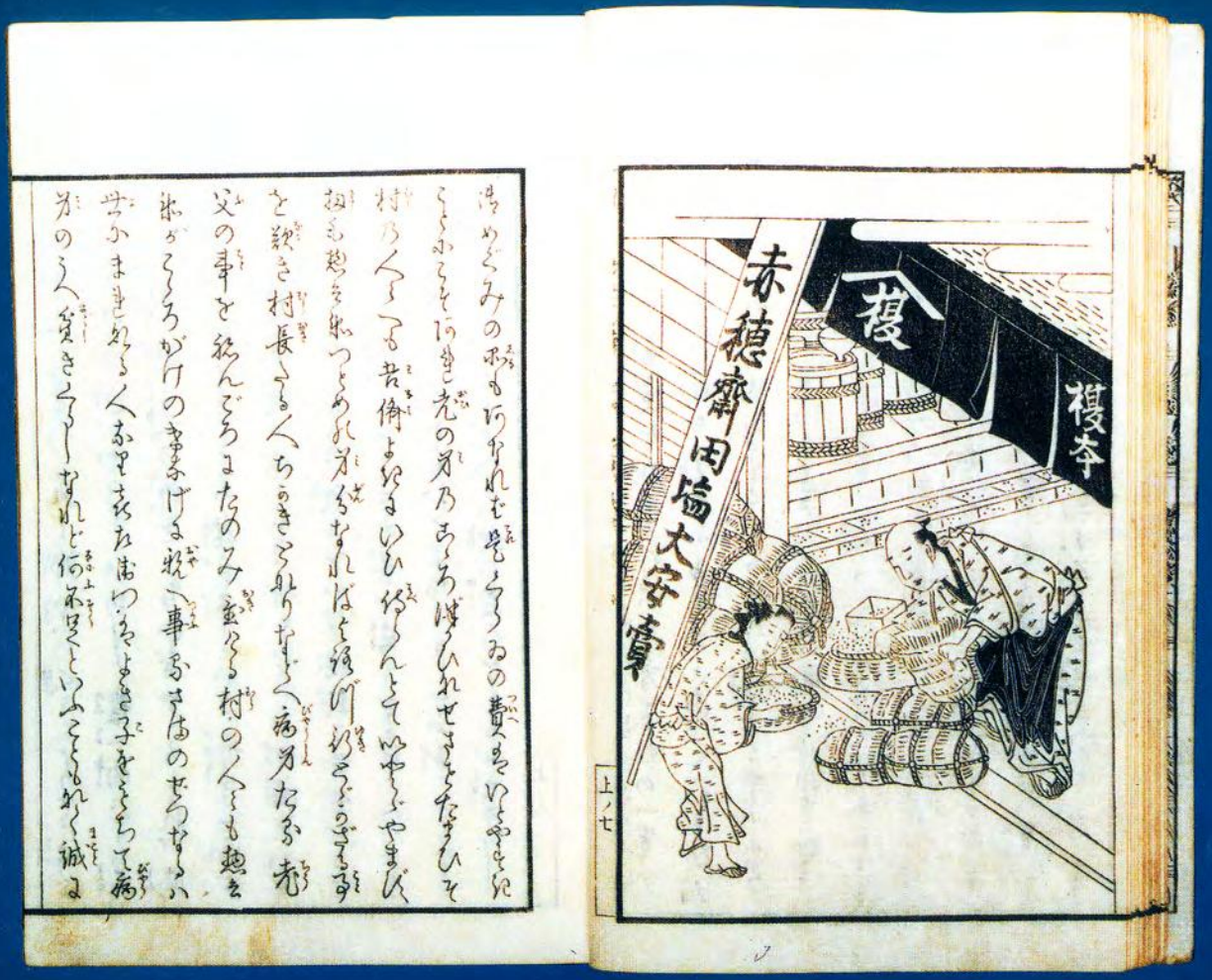
川越市立博物館

博物館だより

第32号



武州川越善行録（川越市立博物館蔵）

「武州川越善行録」は、川越に住む栗原満啓という人物が川越近在33人の善行をまとめた書物である。刊記が無いため刊行年は不明であるが、自序に文政２年（1819）秋とあることからそれに近い出版と考えられる。本書は上・中・下の３巻からなり、上巻に４人、中巻に13人、下巻に16人の善行が記録されている。善行者33人の居住地は、川越城下とその周辺が大半ではあるが、武蔵国の埼玉郡（現在の羽生市等）なども含まれていることから、当時の川越藩領の善行者を広く採録したものであろう。また本書には30葉の挿絵が収められており、その内27葉が雪江という絵師の手になっている。川越氷川神社には、雪江筆の文政11年銘絵馬「韓信股くぐり」があり、同一人物と考えられる。

編者の栗原満啓についての経歴は今のところ不明である。自序によると川越に住し、文政２年に79歳であった。本書の序文には蝦夷地探検で知られる最上徳内（1754～1836）、跋文には楽水堂道意と称した国学者の沼田順義（1792～1849）が名を連ねている。満啓の交友関係を推測する手がかりとなろう。

江戸幕府はこの時期善行者の集録を手がけており、享和元年（1801）には幕府編纂の善行集「孝義録」50巻が刊行され、引き続いて続編が企画されていた。「武州川越善行録」刊行の背景として、こうした動向も検討を要する課題である。

石仏のはなし

南古谷郷土史研究会

顧問　阿部 徳之助

野の仏たち

古い歴史と豊かな風土に恵まれた川越。ここには民間信仰の対象として、江戸時代から数多くの石仏が建てられてきました。

造立者の多くは、長い歴史の中で、戦乱こそ収まりましたが、天災による飢饉、凶作、水害をはじめ、疫病などに悩まされながら生きていた人々であったのです。かれらは、今のような医薬も無い時代、唯一心の拠り所として、路傍に佇む石仏たちに祈りを捧げていたのです。

当時はどこの村にも石屋さんがいたといわれています。村内や町内で、月々なにがしかを蓄えておき、吉日を選んで建てたことを記すものもあり、また、講中を結び、適当な場所に建てた庚申塔もあり、また、ナニサマであるかも分からない石サマもあります。

石仏は野の仏としても親しまれてきました。風雪に耐え、人々と共に喜び、悲しみ、そして生きてきた仏たちです。収穫時に出雲の全国集会にお出掛けにもならず、身近にあって村人と親しみ、人々を守るというアラタカな「カミ」なのです。そして、今も素朴さと微笑ましい姿を我々にみせてくれています。

しかし、車社会の今、道は直線に変えられ、車を主とした道路となり、人が静かに歩を進められる道は消えつつあるのです。川越には、さまざまな千数百体もの石仏たちがおられる。つい先日、博物館主催の石仏巡りのとき、ある所では交通事故に遭ったと思われる、無残な姿に変わり果てた馬頭観音もありました（写真①）。

写真①　交通事故に遭ったと思われる馬頭観音
（川越市並木・瀧岩院前）

こうした石仏たちは、この地域に生きた人々が、風土と歴史、その社会環境のなかで築き上げてきた文化なのです。現代の急激な生活の変化のなかで、次第にその存在意義を失って行くのでしょうか…。だが、今の生活は、その様な文化の上に築き上げられたものです。今後どんな生活文化を築くにしても、先人が築いた文化に対する理解なくしては、より良い文化は築かれる筈がないのです。長い年月にわたり生活を支えてきた文化は、私たちの意識や価値観に大きな影響を与えているからです。

有名な石仏

日本の石仏は、単独丸彫りの石仏や磨崖仏などが多く造られましたが、石質の関係からかごく古いものは損傷してしまい、あまり多くは残っていません。その数少ない中から、古い石仏たちをいくつか紹介してみましょう。

まず現存最古とされるのが、奈良県桜井市忍阪の石位寺の三尊石像です。製作は奈良時代前期とされ、中尊は椅子に掛けて脚を垂れ、左右に脇侍が立つ構成で、高さ約1.2ｍの一石に三尊を刻み出しています。寺伝では薬師三尊とされていますが、釈迦・弥勒などの諸説があって、像容は未詳です。

奈良市高畑町には、同じく奈良時代から製作された頭塔石仏群があります。玄昉僧正の首塚という伝説のある方錐形の塚（頭塔）の周囲に、花崗岩に釈迦三尊などを刻んだもので、13基が現存しています。その様式は奈良時代の押出仏に似るところが多く、我が国の石仏中でも屈指の作と目されています。

一方の磨崖仏としては、先ず京都府の笠置山磨崖仏群（相楽郡笠置町）が有名です。その中でも弥勒石という、高さが約12ｍもある巨大な花崗岩には弥勒仏立像が線刻されてあり、弥勒信仰が盛行した平安・鎌倉時代には広く尊崇を集めたといわれます。

この弥勒仏立像は、惜しいことに、南北朝時代の元弘元年（1331）、幕府六波羅軍の笠置攻めの際、兵火により損傷してしまいましたが、付近には平安期の作とされる、高さ約８ｍの伝虚空蔵菩薩像（観音菩薩或いは弥勒菩薩ともいう）などもあります。

関東地方では、宇都宮市荒張の大谷寺磨崖仏が有名です（写真②）。大谷石（凝灰岩）に彫出した千手観音（大谷観音）・伝釈迦三尊・伝阿弥陀三尊などで、平安時代の作と伝えられ、滋賀県狛坂寺跡の磨崖仏と共に巨像としてよく知られています。また、群馬県甘楽郡甘楽町長巌寺の観音山には、昭和初期に素人の彫出した菩薩仏頭があり、川越の近くとしては数少ない磨崖仏です。

写真②　大谷寺磨崖仏　千手観音（大谷観音）
【写真提供：栃木県立博物館】

庚申さまのこと

有名な石仏はさておき、民間信仰の対象となった石仏としては、地蔵・観音・道祖神・庚申塔などが広く知られています。その中でも多様な像容を示すのが、江戸時代に各地で盛んに造立された庚申塔です。

一般的には、主尊に青面金剛と呼ばれる神像（仏教の守護神）を現し、左右に日月を、足下には三猿や鶏を配したものですが、釈迦・文殊・帝釈天などを始めとして、思いもよらない石仏に日月・鶏・猿が彫られているものがあって、興味が尽きません。

川越市域の庚申塔は大護八郎先生の調査では92基を数えましたが（注１）、私の郷里である秋田県雄勝郡稲川町には約120基の庚申塔が現存します。その中には、寛政12年（1800）に建てられた、高さが14尺5寸（約4.4ｍ）、幅が５尺８寸（約1.8ｍ）もある大きな文字塔の青面金剛童子碑もあります。この文字塔に刻まれた青面金剛の「剛」の字は、旁のリットウが流し書きになっていますが、剣難を恐れたためという言い伝えがあります。

なお同町には、高さが９尺３寸（約2.8ｍ）もある石の半丸彫り仁王像もあります。かつて毎年春秋の２回、年番の人たちがワラで巨大な草仁王を作っていましたが、幕末の天保14年（1843）になって、手数がかからないよう石造に改めたものです。

このように、民間信仰が盛んで、庚申サマやドウゲンサマ（道元様）の講宿でもあった家―屋号を丹右衛門という―に育った私は、学校に上がる前の小さい時分から、根雪の頃、ミズヤシマイ（夕飯後の始末）が済み、フロの前に母が話してくれた数々のムカシッコ（昔話）に思いを寄せました。その中でも、庚申さまにまつわる話は今も鮮明に浮かんでくるのです。

母の話のホントは方言そのもの。少しく手を加えて訳してみましょう。

…人間サマの罪悪は、見る、聞く、言うの三門によって起こるんだド。ンダガラ欲を去れド。庚申の夜マ寝るとシェ災厄はその身に及び、その夜孕めば、子は長じて賊となるッテ言うナナベ。まずナ、青面金剛さんナバ、インドの神話にあるベド。日本でナバ帝釈天さまのお使いとなってナ、雨と風ェ伴って地上に降りてくるド。この神さま祭れば、テンテサマ（天帝様）に告げ口する上尸・中尸・下尸という、三匹の虫シェ封ずるというんダド…。マンズこの虫ナバシャ、人の腹の中にいてナ、庚申の晩ナ、人が眠ってしまうと、とたんに天サ昇り、テンテサマにその人の悪事を告げるンダド、おっかねべ。ソシェバその人は長生きしなかったンダド言うナダッケ…。

…ンダガラナ、トンバサマ（青面金剛）の掛け軸をナ、掛けてシェー晩中みんなで話ッコしながら寝なかったんだベタヨ…。一番鶏、二番鶏が鳴けば夜が明けてくるベ、その頃になればナ、シンゴン（光明真言）モシテ（申して）みんなで、ショウキャラー、ショウギャラー、ショウキャラー、ショウギャラーって何度も何度も唱えるんだヨ（注２）。…ハイットッピンカラリノ…プウウ。オメーダジ終わりだヨ。明日は早起きしてケロヨ。スミ子、トクジロ、トクノスケ、湯コサ入ってケレ。…ンダバやすんでタンシェ。

庚申講の祭りは、十干十二支の最小公倍数である、60日目に回ってくる庚申の当たり日で、普通は年に６回で、年によっては５回のときと７回のときがありました。

庚申の日の夜に眠ると寿命が縮まり、眠らずに謹慎すれば災難から逃れられると信じられ、その夜は、村の老若男女が集まり、身を清め行いを慎み、一晩中眠らないようお互いに戒めあい庚申さまをお祭りしたと言います。

とはいえ、ひたすら行いすましていたばかりでもなく、「話は庚申の晩に…」と言われるように、煮しめ、芋、自慢のガッコ（漬け物）などをお互いが持ち寄り、ドブロクを飲みながら、皆で四方山話に興じたものだそうです。みだりに集会を許されなかった当時には、人々の楽しい交流の場でもあったのです。

注１　昭和48年川越市発行「川越の石佛」
注２　ショウキャラー、ショウギャラーは、「しょうけら」で、庚申の晩に早く寝ると災禍をもたらすという鬼のことと思われる。

記念絵はがきの御紹介

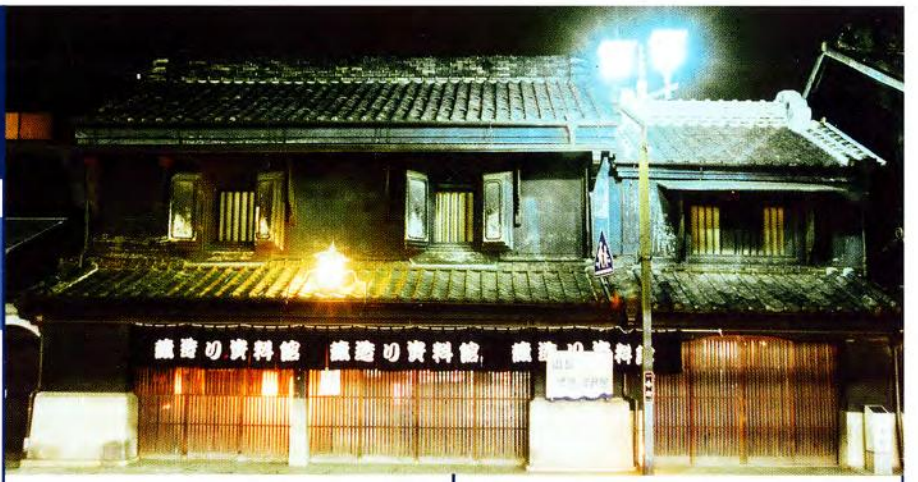
《博物館受付でお求めいただけます》
第３回特別展
「川越の生んだ鬼才　岩崎勝平」
の絵はがきです。

Ａセット・Ｂセット　各300円
各４枚組（絵柄４種類ずつ）

Ａセット

Ｂセット

分館だより
―― 蔵造り資料館 ――



一番街のあかり

平成12年12月24日から平成13年1月8日にかけての年末年始、一番街周辺で、ライトアップ「年末年始川越ゆめあかり計画」が実施されました。

これは、一番街商業組合が企画したもので、地元の方々と、学生を中心としたスタッフによる試みでした。

通りに面した各家・各商店の窓からのあかりも工夫され、足もとにも、小さく可愛らしいあかりがともされました。時間・場所によっては、街灯が消され、暖色のあかりが強調されました。

蔵造り資料館でも、一階部分、庭、建物前にあかりがともり、普段と違う柔らかな光に包まれていました。

一段と寒かった今年の冬、冷たい大気の中で、和紙や籐等から漏れる光は、日頃見かける白色のあかりとは異なる味わいで、家路を急ぐ人達の心を温めてくれるようでした。

今回は、これらのあかりのなかからごく一部を御紹介します。

図録販売の御案内

当館では、過去の企画展等の図録も販売しています。受付での直売のほか、郵送でも承っています。

郵送の場合は、各図録代を現金書留で、郵送料分の切手を添えて、当館宛にお申し込みください。届き次第、図録を発送いたします。

各図録代・郵送料については、博物館までお問い合わせください。

石原の ささら獅子舞

平成13年４月26日（木）までの展示

石原のささら獅子舞は、毎年４月第３土・日曜日に石原町１丁目の観音寺で行われます。陰祭りと本祭りがあり、１年毎交互に行われています。陰祭りは観音寺の境内で舞うだけですが、本祭りでは町内回りも行います。

獅子舞の起源は、慶長12年（1607）から始まると伝えられています。寛永11年（1634）、川越藩主酒井忠勝が若狭国小浜（現福井県小浜市）に転封（てんぽう）の際、獅子頭２頭を連れて行ったため一時中断しました。しかし、宝永６年（1709）に高沢町（現元町２丁目）の井上家から獅子頭の奉納があり、復活しました。

ここの獅子舞は「一人立（ひとりだち）の獅子」の系統で、３頭の獅子、山の神、笛や歌うたい、花笠と振り袖で着飾ったササラッコなどにより行われます。この３頭の獅子は先獅子、中獅子、後獅子と呼ばれ、太鼓を打ち鳴らしながら曲目の場面に合わせて緩急巧みに舞い踊ります。

町回りでは、天狗、山伏を先頭に行列を組み、愛宕八坂神社などで舞いを一庭（ひとにわ）奉納します。また、町境でも舞われますが、そこには疫病や災いが町内に入ってこないようにという祈りが込められています。

川越を代表する獅子舞で、昭和55年３月29日には、県の無形民俗文化財に指定されました。

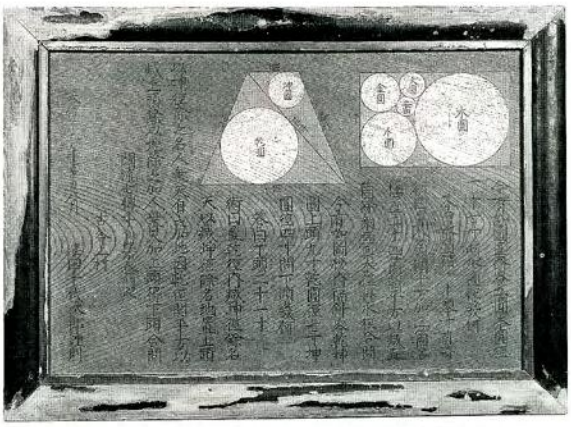
算　額

古尾谷八幡神社蔵

庶民の間に学問への欲求が高まってきた江戸時代中期には、全国的に寺子屋や私塾などが普及していきました。寺子屋では武士・神官・僧侶・名主などが師匠となり、庶民の子弟を集めて読み・書きなどの初歩的教育を行いました。また、より専門的な教育の場として、算学や漢学などの塾が民間人によって設立されました。

川越地方でも算学塾や漢学塾の存在が確認されていますが、まだその実態は明らかにされているわけではありません。このうち算学塾は市内に数名の和算家が確認されており、多くの門弟に日本古来の数学である和算を教えていました。彼らは庶民に和算を教えるとともに、自己の研究の成果を神社などに「算額」として奉納しました。

写真は天保12年（1841）に古尾谷八幡神社に奉納された算額です。奉納者は古谷上村（現川越市大字古谷上）の沢田千代次郎です。千代次郎は川越藩士手島喜次郎清春に関流算学と測量術を学び、多くの門弟に算学を教授しました。彼は兄弟等が多かったことにより、毎日自分の好きな算学の指導に精進できたようで、その門人も八畳の部屋が一杯になるほどだったと伝えられています。



古尾谷八幡神社の算額（川越市指定文化財）

「川越の職人」コーナー

石工（いしく）

城下町川越の伝統的な職人の仕事場を再現する「川越の職人」コーナーでは、毎年１回の展示替えを行っています。

平成13年10月頃までの展示

石工は、山から切り出した石を墓石・記念碑・建物の土台などに加工する職人です。

石工の１日の仕事は、ノミなどの道具の手入れから始まります。手入れでは、刃先の鈍くなったものを鋭く直します。まず始めにホドにフイゴで風を送り、火をおこします。その中で道具の先端を熱し、鎚で叩き刃先を整えます。最後に、水を張ったトブネで急冷し、ヤキを入れます。

道具の手入れが終わると、石を加工する作業に移ります。石は完成品より少し大きく割り、あらかじめスミツボやカネジャクで付けた印を目安に削っていきます。コヤスケで高いこぶを落とし、ノミをセットウで叩きながら表面を削ります。そして、ビシャンやリョウハを使ってこぶを叩き削り、平らにします。それから鉄砂と砥石で磨き上げ、表面を滑らかにして仕上げます。この他に加工では、文字を彫ったり、彫刻もしました。

これらの作業はすべて手仕事でしたが、昭和30年代頃を境に機械化が進み、作業が軽減されるようになりました。

第17回企画展

歴史探検　縄文時代をゆく

特別展示室の展観

平成13年３月24日（土）～５月６日（日）

漆塗櫛　後谷遺跡（桶川市）　　深鉢形土器

これまで縄文時代は、未開で野蛮な時代と考えられてきました。しかし、近年行われた三内丸山遺跡をはじめとする多くの縄文遺跡の発掘調査によって、この時代の豊かで多様な物質文化・精神文化の一端が明らかになってきています。

埼玉県内においても、桶川市後谷遺跡や川里村赤城遺跡などから、漆塗櫛・丸木弓・漆器など縄文人たちのくらしを具体的に物語る品々が出土しています。

この展覧会では、縄文時代中期の集落跡である川越市藤原町遺跡の発掘現場を出発点とし、縄文文化が成熟した縄文時代前～晩期の世界を訪ねてみたいと思います。

編集後記

・今号には、阿部徳之助氏の「石仏のはなし」を掲載致しました。御多忙のところ、御寄稿いただきました阿部氏に厚くお礼申し上げます。

・当館「博物館だより」が、埼玉県市町村教育委員会広報連絡協議会主催の平成12年度広報コンクールで入賞しました。

・間もなく新しい年度が始まります。従前にもまして市立博物館への御支援をお願い致します。

----- 利　用　の　御　案　内 -----

◆開館時間　午前９時から午後５時まで（ただし入館は４時30分まで）

◆休 館 日　月曜日（休日は除く）、毎月第４金曜日（休日は除く）、休日の翌日（土・日曜日は除く）、年末年始（12／28～１／４）、燻蒸期間（７月上旬頃予定）、特別整理期間（12月中旬予定）

◆入 館 料

区　分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	3館共通券〈博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館〉
大　人	200円（160円）	100円（80円）	100円（80円）	300円
学生･生徒	100円（80円）	50円（40円）	50円（40円）	150円
児　童	50円（40円）	30円（20円）	30円（20円）	80円

●（　）内料金は、団体〔20名以上、１名につき〕の場合。

●開館時間・休館日は、３館とも同様。（燻蒸期間・特別整理期間は博物館のみ休館）

交　通　案　内

東武東上線・ＪＲ川越線　川越駅より
または西武新宿線　本川越駅より
東武バス　「札の辻」下車徒歩８分

発行日　平成13年３月10日　　発　行　川越市立博物館
〒350-0053　川越市郭町２丁目30番地１　☎ 0492-22-5399
FAX 0492-22-5396

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています